
渡の日

石田梅

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

渡の日

【Nコード】

N5498H

【作者名】

石田梅

【あらすじ】

渡は日々を淡々と過ごす。家族は母と祖母と妹と、そして変わり者の年若い叔父。渡は女だが、心はどちらかといえば『男』であり、叔父の晃いわく男だけど『女』であるという。それ以外はまったく普通の渡だが、そんな普通の毎日に溶け込んでいるちよつとした奇妙な出来事。はたして渡は『女』なのか、『男』なのか。一話完結の短編集。

西瓜（前書き）

精神的な同性愛が含まれるかもしれませんが、
ほとんどわからない程度のもですが、
苦手な方はご遠慮ください。
平気な方は是非どうぞ。

西瓜

西瓜は冷蔵庫に入っていたわりには、あまり冷えていなかった。がぶりと噛み付くと口の中に水が流れる。味も薄い。いや、西瓜はもともと味が薄いものだったか。

風通しの悪い台所は妙に生暖かくて、二口目にはやっぱり美味しいかもしれない、と考え直した。しかし三角形の頂点を食べ終わると、うす紅い身から無数の黒点がのぞき、思わず眉をひそめた。これだから、と渡は思う。家族はこの面倒を嫌って西瓜を食べようとしない。種無しにしても甘みが無いに違いないといって拒否する。もらい物でなければ、この家には存在しないものだった。

家族も全員出払っていて、今は渡一人しかない。気兼ねなく、不作法な食べ方ができるといふものだ。台所での立ち食いは見つかったら叱られる行為であったが、たれる汁に気を遣い、種をまとめて捨てるという作業がいらぬ場所は、ここしかない。

渡は西瓜は嫌いではないが、口の中で身と種を選別するのは嫌いだ。おちついて甘みを楽しむことが出来ないからだ。流し台の中へ落ちていく種は、食べる者をバカにしているとしか思えない。

いっそ種も飲み込んでしまおうか。そうしたら西瓜はしてやったりとほくそ笑み、腹の中で成長を始めるに違いない。養分はもちろん紅い身と己を食らった人間の肉だ。西瓜は無数の蔓をのばし、渡の身体を蹂躪する。そして渡もついには西瓜になって、次の獲物を待つことになるのだろう。

きつと実がなるのは頭部だ。浜辺の遊びの残骸を思い出して、渡はようやく種が少なくなってきた底辺をしつこくかじった。

そんなことがあった日から数日後、網に入った西瓜をぶら下げて晃が帰ってきた。

「またもらってきたの」

「ああ。お前、食べるだろう」

晃は年の近い叔父だ。とはいっても10は上だから、いつも渡を子ども扱いしている。本人は否定するが、渡からすると十分不満だった。

「だからって、丸々1個食べられるわけじゃないじゃないか」

この前は六分の一の切り身だった。だからこそ2日で制覇できたわけだが、丸々1個、ましてや大振りの西瓜なんて。

「俺も食べたくなっただんだ」

「え」

晃は冷蔵庫の前にしゃがむと、なんとかして西瓜を入れるスペースを作ろうと苦心し始めた。

「周りでな、今西瓜がはやっているんだ。皆食べたがっている」

「それに乗せられたわけ」

「ああ」

晃は無理矢理詰め込んだ西瓜を満足そうになでて、身体を起こした。渡を見下ろしてにやりと笑う。

「絶対にうまいだろうからな」

「……俺がすすめても食べないくせに」

「なんだ、妬いてるのか」

そんなわけないだろう、と渡は冷ややかな目線だけで答えた。晃はそれを無視し、離れの自室へ引っ込むことにしたようだ。その背中を見送っていると、不意に晃が渡を振り返る。

「楽しみにしてるんだ。種までしっかり食えよ」

絶句した渡を先ほどの西瓜と同じように満足そうに見やると、晃はまた背中をむけた。

渡は、また家族の不在時に台所にいた。西瓜の種は当然吐き出した。しかし、誤って一粒だけ、飲み込んでしまったような気がした。確信は無かった。

晃はといえば、結局一口も西瓜を口にしなかった。

その後奇妙なことが続いた。誰も彼もが西瓜を持ってくるようになったのだ。母の時子はお隣からのお裾分け、祖母は商店街の福引きわめつけは妹の守が知らない人からもらったという西瓜の山！仕方が無いので台所の隅に転がしてある。数えてみると7玉あった。晃が持ってきた西瓜がまだ半分以上残っているというのに。

のん気な祖母は「西瓜に好かれちゃったのかしらね、今年は」と笑い、時子は呆れるとともに知らない人からモノをもらってはいけない、と守に説教した。守はむすつとしながら、「だって『きょうだい』で仲良く食べてねって言われたんだもん！知り合いだと思っただけ」と言いわけをした。しかし守が言うような、背がひよる長くて白いコートを着た、顔色の悪い学者風の知り合いなど渡にはいない。こんな時期にコートなんて。そもそも、渡は西瓜が好物だなんて言ったことは一度もなかった。

渡は身体の中で蔓が這い回っているのを感じた。ぞるりぞるりと動くそれに、不快感と昂揚感がないまぜになる。身体は動かない。なんとか頭だけが働くが、それも時間の問題だろう。

誰かがコンコン、と渡の頭を叩いた。何かを確認しているような仕草だ。そして優しく渡の頭を持ち上げると、勢いよく地面にたたきつけた。

渡は自分の頭が崩れる音を聞いた。それでも痛みはなく、意識はハッキリしている。

誰かは渡に顔を近づけると、満足そうに笑って唇を吸った。

その瞬間、解放されるように渡の身体に快感があふれ出る。

背中に汗をかいて飛び起きたとき、渡は頭に手をやって割れていないことを確かめた。

嫌いなものを我慢して食べるような人間は、川下家にいない。自

分たちが持ってきたにも関わらず、渡が西瓜の扱いを一任されることとなった。困り顔の渡を、晃は楽しそうに見物している。

「だから言っただろう。はやっているんだ」

「なぜ」

「うまそうだからだよ」

晃はコンコンと渡の頭を叩くと、不意に渡の頬を舌でなぞった。

ぞわり、と渡の身体が震える。払いのけて睨んでみても、晃は飄々としていた。

「何するんだよ」

「決まってる。味見だ」

晃は適当に並べられた西瓜を見て、

「こいつらは俺が片付けてやるよ」
と言った。

「どうせお前一人じゃ食べきれないんだ」

「それは助かるけど……」

「だから、お前は俺が持ってきた西瓜を早く食っちまえ」

種まで残さずな、と言い残すと、晃はダンボール箱をとってきて西瓜を詰め、どこかへ行ってしまった。

帰ってきたときは手ぶらで、本当に西瓜をどうにかしてきたんだ、と渡は思った。

それからは西瓜は誰も持ってきて来ず、渡もとりあえず安心した。晃は時折渡の頭をコンコン、と叩いていたが、それもしばらくするとやめたようだった。諦めた、とつまらなそうに呟いていた。

西瓜（後書き）

読んでいただいております・・・！！

宜しかったら是非感想をお願いします。どんな内容でも結構です！

今後の参考にさせていただきます。

次回もよろしく願います。

風鈴

渡は自分の名前が嫌いだ。だから自己紹介もできるだけ苗字で済まそうとしているし、もし呼び間違ったとしても訂正しない。

何を思っであんな名をつけたのか。もっと考えてほしかった。

渡は『わたし』であって、『わたり』や『わたる』ではない。つまり自己紹介のときは「僕はワタシです」と言わなければならないのだ。おかげで小学校でも中学校でも、イヤというほどからかわれた。高校もそれは変わらない。

だったら妹には『ぼく』と名づけてやれと思ったが、妹は『まもり』におさまった。不満はあったが、妹が自分と同じような苦勞をしなくてすんだ、と安心もした。

時子は、渡たちきょうだいの名前について聞くと露骨に眉をひそめた。そして決まって亡き夫の文句を言うのだ。

「架さんも何を考えていたんだか、あんたたちが生まれる前から名前は決めていたのよ。ひどいと思わない？ あたしが産むっていうのに」

「確かに、アレはおもしろかった」

晃は自室の籐椅子にだらしく座っていた。渡の顔を見ながら、昔を思いだしているのだ。小さなグラスにはあわ立つソーダ水が入っている。差し込む日は強いが、晃の周りだけは涼しそうだ。実際、彼のシャツには汗など滲んでおらず、いつも通りの飄々とした態度を保っていた。本当ならば冷酒が似合うのだろうが、まだ昼間で、相手が未成年の渡であることに気を遣ったのかもしれない。「公園で遊ばせてたら、お前はいきなり転んでな。慌てて名前を呼んで抱き起こしたぞ」

大の男が小さな子どもを抱え、

「大丈夫か『ワタシ』、泣くな『ワタシ』」

と繰り返し言っているのだから、周囲の視線はどんなものだったのか、想像に難くない。

「迷子の時だつて、『ワタシ』どこだー、だもんな。錯乱している
としか思えないな」

「そう思うなら父親に言ってくればよかったのに」

「そうもいかない。あの人なりの考えつてもんがあつたんだから」

晃は兄夫婦と別に暮らしていたが、架の死後、この家に戻ってきた。それが遺言だったらしい。渡も常々疑問に思っているのだが、晃は架を母のように軽んじてはいないらしい。

渡が3つで守がまだ時子の腹の中にいたころ他界した父を、渡は覚えていない。一緒にいた、という覚えすらないのだ。

「かわりに俺がお前の面倒をみてたんだよ。兄貴は忙しかったから
な」

ここまで大きくなれたのも俺のおかげだ、感謝しろ、とこの叔父は事あるごとに言ってくる。

「もういいよ」

愚痴るどころか、からかわれて苛立ちが増しただけだった。渡はさつさと部屋を出ようとした。気晴らしに散歩でもしてこようと思つたのだ。

「待てよ」

いつの間に立ち上がっていたのか、晃は渡の背後に立ち、渡のジーンズの後ろのポケットに手をすべりこませた。

「なに」

「さあ」

晃はわざわざ身体を折って顔を渡に近づけると、いつものニヤニヤ笑いをした。こういう叔父には何を言っても無駄だ。渡は早足で廊下に出て、そのまま玄関へと向かった。

コンクリートが熱をもち、渡の身体から体力と水分を奪っていく。外に出たのは失敗だったかと後悔した。

その時、ちりと儚い涼しげな音がした。見上げた家のベランダに、逆さになった金魚鉢がぶら下がっている。渡は一瞬そう思ったが、それはサイズが規格外に大きな風鈴であることがわかった。舌は子どもの拳ほどもあるだろう。薄青いガラスには、尾の長い金魚が何匹か泳いでいた。図体に似合わない可愛らしい音を出している。日の光りにとけて、ガラス模様が無粋なコンクリートに映っていた。少し気をよくした渡は、もうしばらく歩いてみることにした。

普段歩きなれている道とはいっても、意外に見ていないものだ、と渡は妙に感心していた。あんなに大きな風鈴を飾っているウチがあるなんて。守にも教えてやろうか。いや、ウチにも飾りたがるかもしれないからやめておこうか。

「こんにちは」

ぼんやりと考え事をしていたせいか、前から人が来たことに気づかなかった。逆光で顔はよく見えないが、背の高い若い男性だった。この体格でこの声なら、きっと顔もいいだろうと渡は思った。折り目正しい白いシャツがまぶしい。

「こんにちは」

渡はとりあえず返事を返した。

「暑いですね」

「ええ、本当に」

「珍しいですね、こんなところで」

「たまには歩いてみようか、と思ったんです」

誰だったか。母の店の客だろうか。

時子は商店街の一角で雑貨屋を営んでいる。しかし、彼が彼女の店に似合うかといったらそれもまた疑問であった。

「用事の途中なので、失礼します」

ボ口が出ないうちに別れたほうがいいだろうと判断した渡は、手軽な嘘をついた。

「用事ですか」

「はい」

ほう、と不思議そうに問い返された。嘘がばれたのか。だとしても、この男になんの関わりがあるだろう。どうでもいいことなのに、渡の背中がゾクリとした。

「そうでしたか、では、また」

予想に反し、男は何事もなかったかのように一礼すると、そのまま立ち去っていった。

なんだったのか、と渡は首をかしげ、また歩き出す。暑さはいつの間にか忘れてしまっていた。

しばらく歩いていくと、またちりと音がする。

見上げてみるとやはり風鈴があつた。おや、とよく見ると、先ほどの家にあつた金魚鉢と同じものであつた。流行だろうか。妙なものがはやつたものだ、と渡は思ったが、音は悪くない。

おかしい、と思い始めたのは、七つ目の金魚鉢を見つけたときだった。心の中で一步、二歩と数えていくと、ちょうど百歩進んだとき、頭上からちりと音がした。これで八つ目。九つ目も百歩歩いた先にあるに違いない。こんな奇妙な習慣は聞いたことが無い。

それに、と辺りを見回すと、風景が先ほどからずっと変わっていないことによく気づいた。幅六メートルもないせまい道。両脇の白い壁。右へ左へと続く曲がり角。住宅街だというのに、最初にあつたあの男以外は誰一人としてすれ違わなかった。予定ではとくに商店街にでているはずなのに。どうして疑問もたずにここまで歩いていたのか、と自分の鈍感さにため息が出た。

昼過ぎの一番暑い時間に出たはずだが、いつの間にか日は傾き始めている。歩数に比べ、いったい何時間歩いていたというのか。

どうしたものかと立ち止まると、今度は後ろから

「こんにちは」

と声をかけられた。

あの男だった。太陽の位置が変わったおかげでようやく顔を見ることが出来た。渡の知らない人間だ。たぶん、母も知らない人間だろう。

華はないが、やはり整った顔立ちをしていた。

「また会えましたね。用事はすみましたか」

「ええ」

まさか迷子だとも言えず、言葉を濁す。それを見透かしているかのように、男は渡に微笑みかけた。

「いいことを教えてあげましょうか」

「いいこと？」

突然何を、と思う間もなく渡は男に腕をとられ、引き寄せられた。驚くほどに力が強い。成すすべもなく、渡は動きを止められた。

「これをお使いなさい」

腰をとらえた男は、渡のジーンズの後ろポケットに手を滑り込ませた。晃の仕草が蘇る。

腕をつっぱらせて距離をおくと、渡は男を睨みつけた。

「……あんだ、晃の知り合いだろ」

「顔見知り程度ですよ」

男は唇をぺろりと舐める。

渡はもう一度睨みつけてから、背を向けて歩き出した。ついでにポケットも探してみる。気づかなかったが、そこには飴玉が一つ入っていた。この暑さだというのに溶けていない。透明な水色の飴だ。これがなんだというのか、と晃やさっきの男をバカにしたが、どうせやれることもない。口に飴玉を放り込んだ。

しゅわりと広がる甘味がソーダ味だ、とわかった瞬間、渡は自分が今どこにいるのかを理解した。この角を左に曲がると我が家が見える。

後ろを振り返っても、そこは見慣れた道と変化はなかった。あの男もいない。

渡は飴を口の中で転がして、家の門扉をくぐった。

「よかったよ」

ただいま、と靴を脱ぐ渡にむかつて晃は言った。

「何が」

「また探しに行かなくちゃならないかと思った。ワタシはどこだつてな」

何が起こったのかはすべてお見通しだ。

そんなニヤニヤ笑いが気に入らず、渡は飴をゴリリと噛み潰した。

いづ（前書き）

うつすら同性愛かも。本当にうつすらですが。
苦手な方はお気をつけください。

こぶ

しとしとと降る雨が、うだるい空気を洗い流す。

久しぶりに気持ちの良い朝だった。連日の熱帯夜で眠りの浅かった渡だが、昨夜は気持ちよく眠れた。

渡は夏がけに包まって、その余韻を楽しんでいた。家の者が動く気配を感じる。近づいてくる小さな足音。

「お兄ちゃん、いい加減におきないと、お母さんが怒るよ」

ノックもせずに扉を開けた妹を薄目で見やり、渡は軽く手をふつた。わかった、という了解の合図だ。

もう、と息をついた後、守の足音が遠のいていくのが聞こえた。きつと口をとがらしていることだろう。朝に弱い渡を見限り、妹は次の部屋へ向かったようだ。どうせ晁も寝ているに違いない。

己をお兄ちゃんと呼ぶ妹の姿がまぶたの裏に浮かんでくる。それ以外の呼び名を口にしたことがない、健気な妹を渡は愛しく思う。

これ以上グズグズしていると時子の怒りをかうことになる。渡は諦めて体を起こすと、胸元がちくりと痛んだ。のぞきこんでみると、ちょうど胸の真ん中に、枝豆ほどの大きさの腫れ物ができていた。

ぼこりと浮き出たこぶは指で押しても形は変わらない。色も正常だ。痛みも一度ちくりときたきりで、今はほとんどない。仕方ないのでほうつておくことにする。そのうちへこむか、膿がでるかして元に戻るだろう。

渡はそう結論を出して階段を下りた。と、ちょうど離れにつながる廊下を歩いてくる晁と出くわした。

「おはようございます」

「おはようございます」

互いにいってから、晁は渡の髪を触った。

「好き勝手にはねてるな」

「そのうち戻る」

湿気がある日ならなおさらだ。渡の髪は素直で、少し手櫛で整えてやるだけでおさまる。わかっているはずなのに晃の手は止まらない。

その手を払って、渡は食堂へと向かう。

食堂とはいっても大したものではない。廊下に面して前と後ろに引き戸があつて、古ぼけたテーブルと椅子がら脚置かれているだけの部屋だ。そのテーブルに背をむける形でキッチンがある。

「出しといてあげるから、自分たちで片付けなさいね」

時子はようやく現れた寝坊組にそう言い放つと、洗濯物を干しに出て行つた。テーブルにはトーストと目玉焼きに、サラダが二人分用意されていた。狐色のトーストの表面は少し冷めていた。温かいうちに塗られたバターが染み込んでいる。もちろん不満はない。

「ほら」

残っていたコーヒーを自分と晃のカップにそそぎ、晃にはそのまま渡し、自分の分には同量の牛乳を加えた。

それからしばらく食べることだけに集中していると、ふと思い出したように晃が顔をあげた。

「そつえば、まだ礼をもらってなかった」

「何の話」

「昨日の話」

目玉焼きの白身だけを器用に食べている。晃は時折こういった子どもじみた真似をする。

「もうちよつとで金魚になるところだったんだ。当然だろ」

渡は散歩の途中に出会った男を思い出して、ぎゅつと眉をひそめた。

「あんたの知り合いって最悪だな」

「誰の話だ」

「背が高くてがっしりした男。晃の知り合いって言ってた」

「好みだったか」

今度は目の前の男に向かって眉をひそめると、晃は笑った。

「お前も面倒くさいな。認めちまえば楽なのに」

「俺は男だ」

「その通り。でも女だ」

今は選択肢が広がっている。お前にとっては不幸なことかもな。

哀れむどころか面白がっているようにしか見えない叔父を置いて、渡はさつさと食事を済ませることにした。

生物学上の性別は、渡にとって意味を成さなかった。かといって渡は自分の身体に不満を持っていない。奇妙といえば奇妙だが、そういうものだと渡は割り切っている。家族もまたそれを当然として受け止めているようだった。今更口に出してくるのは晃くらいのものだ。

確かに困ることはある。だが、それも大したことではない。外で気をつけるのは一人称くらいなものだ。

腹を満たしてベッドに倒れこんだ拍子に、渡は胸元がまた痛むのを感じた。

こぶは空豆ほどの大きさになっていた。

学校帰りに病院に行ってみても、医師にはなんのこぶなのか見当がつかかねるようだった。虫に刺されたあともなく、赤くなることもなく。

しばらくこの薬をぬって、治らないようならまた来てください。そんな頼りないセリフと共に、渡は診察室を送り出された。

時子にメールを送って数分後、病院の前で止まったのは見慣れた晃の車だった。

「なんで晃なの」

「時子さんは忙しいんだよ」

帰りのバス代を惜しんだことが悔やまれた。晃には知らせたくなかったのだが、自分の子どもより叔父を優先する傾向のある母のこと。すでに承知なのだろうと渡は諦めた。あまりゴタゴタ文句を言うと置き去りにされかねない。渡は口を閉じて助手席に乗り込んだ。車は静かに走り出す。晃の運転は実に穏やかで優しい。なのにとうして本人はこうなのか、と渡は常々不思議に思っていた。

「医者は何だつて？」

「わからないってさ」

「だろうな」

晃は意地悪く横目で渡を見た。

目の前は赤信号。晃はわざわざ身体をひねって、右手の指で渡のこぶに触れた。

「とり方、教えてやろうか」

「……いらない」

渡は家につくまでずっと窓から空を眺めていた。今夜もぐっすり眠れそうな天気だ。

次の日、学校で渡は永瀬綾香と遭遇した。彼女は校内でも評判の美人で、もちろん渡も知っていた。数度話したことはあったものの、クラスが違ったためよく知らない。それに彼女は一人を好む性質で、必要以上の馴れ合いをしない人間だった。

渡が自分の身体に戸惑う少ない例が、綾香のような人間に関わる時だった。

昼休みに廊下ですれ違うと、綾香は長年の友人のように渡を呼び止めた。

「昨日病院にいたでしょう」

「永瀬さんもいたの」

「出てくるところを見ただけ。迎えに来てたのは彼氏なの」

「まさか。叔父だよ」

上がりそうだった脈拍が、晃の話題が出た途端に落ちついていくのを感じた。

「それはそうと、身体は大丈夫」

「ああ、平気。ありがとう」

「お大事にね」

綾香は優しく微笑む。渡は、風になびく髪をおさえる手の白さと笑った唇の形の良さにしばし見とれた。

その白い腕がずっと伸び、渡の胸の間、こぶの上を柔らかくなくなる。

「お大事に」

もう一度言っていると、綾香はさっさと自分の教室へと帰っていった。

こぶがちくりと痛んだ。

きつと一回り大きくなったのだろう。

一週間がたったが、やはり薬は効かなかった。こぶは少しずつ膨らんでいき、今では渡の胸に卵が埋まったように見える。晃は毎夜こぶをなぞり、渡が泣きつくのを待った。渡も意地になって黙っている。しかし、解決法はまったく浮かんでこなかった。

こぶを見るたびに思い出すのは綾香の指。晃の指に綾香の指を重ねてしまったときは、ひどく気分が落ち込んだ。

病院には行かなかった。

「身体の具合はどう」

一週間前をなぞるように、綾香は渡に声をかけた。渡は一瞬だけ気の利いた言葉を搜したが、ばからしくなってやめた。結局出てきたのは、ああ平気、というつまらない答え。だが綾香は楽しそうに、うそつき、と笑った。

「でもいいの。本当はもつと寝かせておきたいのだけど、それではにとられたら意味ないしね」

綾香はすつと指をのばす。

その指で叔父の顔が浮かんできたことに、渡は綾香のとき以上に気持ちが沈んだ。

家に帰って制服から着替えていると、胸元のこぶがなくなっていた。つぶれた痕もなく、まるで消えてしまったようだった。晃に告げると、彼は渡のこぶのあった場所をまじまじと眺めたあと、フンと鼻をならした。

「きれいに取られてやがる。鈍いな、お前は」

俺がもらう予定だったのに、とブツブツ文句を言っている。

とつたのは綾香に間違いない。渡としては晃にとられるくらいなら、綾香のほうがよっぽどましだ。

予想通りというべきか、次の日も綾香は渡に話しかけた。しかも今度は廊下ではなく、わざわざ渡の教室に来てまで、だ。

「良くなったみたいね」

「ああ、良くなったよ」

「怒ってないの」

「怒らないよ。感謝したいくらいだ」

綾香はちよつと驚いた顔をしたが、すぐに楽しそうな笑みにかわった。いつも彼女がぶら下げていた立ち入り禁止の札を吹き飛ばすような、魅力的な口元だ。

「今度デートしてくれたら、このお礼にケーキをおごるわ」

「……本当に」

「もちろん」

渡はまた、この身体が少しだけわずらわしくなった。

こぶ（後書き）

つたない文章を読んでいただいております。
よろしかったら、一言いただけると嬉しいです。励みになります・。
・。

ペン

昼食を終えた後の授業は辛い。眠気と闘うというのは苦行に近い、といつか祖母のキヨ子が言っていた。人生経験八十年を超える彼女の意見は正しい。授業が始まって十五分が経つというのに、渡はまだノートを開いてもいなかった。

黒板の半分以上が埋められたとき、ようやく筆箱に手をのばす。手で探ってみてもお目当てのものは見つからない。おかしいな、と覗き込んでみて、はじめて渡は気づいた。

愛用のシャープペンシルが消えている。

かわりに、見たことのない万年筆が入っていた。太めの黒い胴体は地鉄の重みのある美しさをもっている。キャップのふちには、金の小さな梅の花が咲いていた。思わず見とれてしまふ一品だ。しかし、今渡に必要なものではない。

渡の筆箱は小さく、最低限のものしか入らない。シャープペンシル一本、赤のボールペン、黄色の蛍光ペン、それに消しゴム。赤字でノートをとるのも気に入らず、仕方なくその万年筆を使ったが、扱いが難しい。ノートの紙をひつかいて染みができるばかりだ。

結局、隣の席の男子にシャープペンを借りた。万年筆よりははるかにマシだったが、手に合わない不自由さはその日の授業が終わるまで渡をイライラさせた。

「先を越されたみたいね」

帰り道、綾香は渡の話を聞いてそう言った。

「どついう意味」

「知らないの。今、はやっているの」

綾香いわく、好意を抱いている人物とペンを交換して大事に使うと、その後もずっとうまくいく、というおまじないがあるらしい。

特に渡たちの学年でははやっているというが、渡はまったく知らなかった。

「綾香もやっているの」

「いいえ。やりたかったんだけどね。先を越されたって言ったでしょう」

綾香の笑顔から慌てて目をそらし、渡は違うことを考えようとした。

誰かは知らないが、おまじないだからって、勝手に人の物をとっていくとは。恋人同士でもないのだから意味はないだろうに。とにかく早くペンを返してほしい。

どこにでもある普通のペンで、そこまで気に入っているつもりもなかったが、いざなくなってみるとどれほど自分の手に馴染んでいたかがわかる。自分のものが、あずかり知らぬところでどう扱われているのか、それも気持ちが悪かった。

綾香と別れたあと文房具店に寄り、使っていたものと似たシンブルなペンを一本買った。しかし握ってみて、慣れるまでに時間がかかりそうだと思った。

一限目の授業で、渡は思わず眉をひそめた。ため息を一つついて隣の席の男子に意外に抜けているのだな、と笑われながらまたシャープペンを借りる。入れ替え忘れたのだろうか、小さな筆箱には昨日買ったペンのかわりに例の万年筆が入ったままになっていた。

家に帰って机を見ると、袋から取り出していつでも使えるようにしてある、真新しいペンが転がっていた。

「そりやお前、見初められたんだろう」

晃は笑った。

「何に」

「決まってるだろう」

せつかく晩酌に付き合っただけなのに、晃はそれ以上渡に何も教えようとしなかった。黙って渡に空の杯を突き出すだけだ。

「万年筆って書くの難しいんだよ」

「お前らの世代はそうだよな。俺らのときは、高校入学の祝いにぴったりの品だったんだが。いい物ならけっこうな値段もするんだぞ」
杯を置いて差し出した右手にペンをのせると、それをいじりながら晃はへえ、と驚いて見せた。

「もったいないな。こういうのをいい物って言うんだ。値打ちのわからないヤツのどこがいいんだか」

「ほっとけよ」

「万年筆ってのはいいぞ。その名の通り一途だからな」

次の日、筆箱とは別にシャープペンを一本制服のポケットに忍ばせておいた。筆箱は見ないでおく。授業はそれで乗り切ったが、こういう時に限って面倒なことが起きた。なんでも生徒会主催の新たな校則についての選挙があるらしく、投票用紙が配られたのだが、それは鉛筆不可だった。他にも色付ペン、規定外の場所への書き込みをした場合は無効。投票の際の会話は一切禁止。用意されたのは上質紙。どうせたいしたことのない高校の選挙なのだから、そんなつまらない形式にこだわっていても仕方ないのに。渡はそう思うが、伝統というのは堅苦しいのが大好きらしい。

ボールペンは手帳にはさんであつたが、今日はそれさえも忘れたようだった。一票くらいなくてもいいか、と思つたが、枚数を確認する選挙委員会なるものがあること思い出した。不正がないかを教室の前方で目を光らせている。

どうしたものか。

渡ははつと気がつき、今日始めて筆箱を開けた。やはり、おいてきたはずのペンが堂々とそこに納まっていた。

上質紙をすべる万年筆は、濃淡の美しい筆跡を残した。

渡はまた文房具店へおもむき、筆箱を買った。以前のものより少しだけ大きく、赤ペンと蛍光ペン、消しゴムを入れても、あと二本はペンが入りそうなサイズだ。

後日、事務室前の落し物保管箱に自分のものと似たシャープペンを見つけたが、また嫉妬されても困るのでそのままにしておいた。調べてみると、万年筆は使ううちに持ち主の癖に応じてペン先の形状を変え、自ら持ち主の手に馴染んでいくという。なるほど、確かに一途だ、と渡は思った。

ペン（後書き）

読んでいただいております。

感想をいただけたら更に嬉しいです・・・！

何か思ふことがあります

ましたら、どんなことでもいいので是非。

次回もよろしく願います。

かさ

天気予報は確認していたし、母の時子からも注意を受けた。今日の午後から天気が崩れることを、渡はちゃんと知っていた。ただ、それを思い出したのが靴をはいて玄関を出た後だったというだけだ。生来の無精と、遅刻はしたくない真面目さが合わさって、きっと降らないだろうという根拠のない核心が生まれた。その結果、放課後に渡は教室で大粒の雨を眺めている。

選択肢は三つあった。

家に連絡して迎えを待つ。

雨が止むのをひたすら待つ。

「川下、カサ入ってくか」

—— 誰かのカサに入れてもらう。

黒っぽい緑色をした大きなタイプではあったが、カサとはそもそも一人用。ましてや勢いの強い雨だ。肩が濡れるのは仕方のないことだった。それより気になるのは、カサの持ち主の肩のほうがはみ出してしまっていることだ。

「もつとそっちに寄っていいよ」

「平気」

気遣ってみてもあっさりと返されてしまい、渡にはどうしようもなかった。

それにしても、と渡は左隣を見上げた。

名前はたしか、坂本。クラスメイトではあるが、今まで話すどころか接触する機会がなかった。それだけに、無言の帰り道が重い。

人気のない校門を出てしばらくした時、渡はようやくある事を思

い出した。

「ごめん。坂本くんの家、どこ」

渡の通学路をいつも通り歩いていたのはいいが、坂本はどうなのか。そんな単純なことに気づかない、配慮にかける自分が恥ずかしい。しかし坂本は軽く首を振って、気にするなと言った。

「川下の家の近くだから」

「なんで知ってるの」

「連絡網に載ってる」

淡々と答える坂本の表情は崩れない。言葉のキャッチボールも坂本の豪速球により三往復で終わってしまう。

もういいや、と渡は諦め、坂本と同じく前を向いて歩くことにした。女子学生にはつきものの、井戸端会議ならぬ女子トイレ会議で、「坂本は顔はいいけど何を考えているのかわからない」と評されていたことをふと思い出した。なるほど、女の子というのはよく見ている。

赤くなつた信号で立ち止まる。しかし、通行人はおろか車の一台も通っていない。無意味な停止だ。足にはりつく濡れた靴下が気持ち悪い。

視線を感じてまた見上げると、坂本と目があつた。

すぐそらすかと思つたが、坂本はじつと渡を見ている。

「なに」

「川下のことはよく知らない。でも川下って、変わってるよな」

思わず渡が目を見開く。

「俺に言われるなんて、って顔だ。わかるけど」

「変わってない。普通だよ」

「どうかな。あの永瀬綾香と仲がいいってだけでも変わってる」

「変わってるのは綾香だ」

「確かに綾香は変わってる。だから、あいつと仲いい川下も変わってる」

自分を変人扱いすることよりも、別のことに渡の関心はあつた。

あの綾香を呼び捨てにするクラスメイトがいたとは。含みもこめて、坂本に問いかける。

「坂本くんは綾香の友達なの」

「従兄妹だ」

面倒だから誰にも言うなよ、と坂本は笑った。笑うといつても、口角がぴくりと上がったただけだ。

「それなら、文句なしに坂本くんも変わってるな」

意外なことを告げられた驚きと安著から、思わず口をついて出てしまった軽口に、渡は一瞬ヒヤリとした。だが坂本は気にした様子はない。もう少しだけ口角を上げて、

「そうだな」

と言った。

雨も小降りになってきた。きつともうすぐ止むことだろう。

青になった信号を確認して歩き出すと、坂本はまた口を閉ざした。沈黙は明るくなりつつある空と同じくらい優しかった。

「渡、乗っていけ」

軽いクラクションのあと、晃の車が渡たちと並んだ。

突然現れたことにも驚いたが、晃の顔がどこか固いことに渡は戸惑った。

君、ここまでありがとう、と助手席のドアを開けて促されては、選択の余地はなかった。

「坂本くん、ありがとう」

「いや」

乗り込むまでカサを差しかけてくれる坂本にもう一度礼を言っていると、晃は早々に車を発進させた。

「どうしたの、晃」

「また面倒なもの拾ってきたお前にウンザリしている」

はあ、と大きなため息をつく、晃は左手を伸ばして渡の頭をな

でた。

「人のカサに入るもんじゃない。それが異性ならなおさらだ」

「そんなの俺の勝手だ。同性みたいなもんだし」

「俺、ねえ……」

「晃しかいないんだから、いいだろ」

「俺の前だけならいい。俺はお前の男も女も知っているし分かっている。だが周りは知らないんだ」

「当然だ。それがどうしたの」

「……そんなだから拾ってくるんだな」

晃はバックミラーに小さく映る学生服を睨んだ。渡はそんな晃を横目で見ながら、終わってしまった時間をなんとなく名残惜しく思った。

教室の裏の黒板の片隅に、落書きがしてあった。それ自体はまったく珍しくないが、内容が興味深いものだったらしく、渡が来たときには人だかりができていた。

白いチョークに縁取られた黒っぽい緑のカサの内側には、坂本瑛治・川下渡と書かれていた。

坂本の名前は瑛治だったか、と渡は思った。だが不思議とそれ以上の気持ちはわいてこない。誤解を解くのも、こちらが相手にしないのが一番良い方法だと知っていた。すでに席についていた坂本と話そうという気もしなかった。

「嘘よ、それ」

綾香は柳眉をゆがませ、従兄妹に悪態をついた。

「家が近いのは本んだけど、あいつ渡のこと前から知ってたの。どうせ機会を伺ってただけよ、あの卑怯者は」

一気に言い捨てて口を閉ざした綾香を見て、渡は小さな発見をし

た。唇が、口角が、昨日見たものとよく似ている。

渡は綾香の怒りをなだめながら、昨日の自分が晃の心配した相合傘の力とやらのせいではなかったことに安心していた。

かさ（後書き）

つたない文章を読んでいただいております。
感想・批評などいただけたら嬉しいです。
次回もよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5498h/>

渡の日

2010年10月17日11時37分発行